



浜崎礼三 著

『海の人々と列島の歴史 —漁撈・製塩・交易等へと 活動は広がる—』

本書は、原始時代から中世までの「海に生きた人々」、すなわち漁業・製塩業・海運業・水軍等の担い手たちの推移と、漁村の形成過程の特徴を明らかにすることを目的とした雄大な通史である。本書に込められた著者の意図は、海とともに生きた人々の歴史についての既存の多様な知見を集大成して平易に解説し、多くの人々に理解してもらいたいという思いである。著者は、このテーマに関わる著作の大半が学術書的に過ぎ、歴史についてのかなりの知識がなければ理解しにくい記述になっていると述べ、その欠陥を克服するために、各時代の海人集団の活動の時代背景を的確に描写すること、平明な記述に徹することを自分の執筆態度として宣言している。

著者の浜崎氏は、長く全漁連にあって漁協系統団体の実務と運動に携わってこられたが、1950年代の若き日には東大農学部の学生・大学院生として、近藤康男教授の下で漁業経済の研究を進め、名著とされる『東北段階における宮古の漁業』（ガリ版刷り）を近藤教授と共に著の形で刊行されるなど、学会でも注目される存在であった。また、全漁連退職後には協同組合経営研究所にあって農協・漁協について研究・著作を続けてこられた。

本書は、網野善彦氏の一連の著作に依拠して全体の構図を描き、関連する多数の研

究書から60点を超える豊富な図版を引用して、視覚的に理解しやすい描写を提供している。大量かつ大部の研究書を涉猟しなければ目にすることのできない貴重な地図等が、わかりやすく描かれ、本文でそれにそくした丁寧な解説が付されていることは、類書にはない本書の大きなメリットであり、読者の理解を大いに助けてくれる。また、専門研究書では落とされがちな関連事項への簡潔な解説も行き届いている。

著者の扱っているテーマをごく簡単に紹介すれば、以下の通りである。第一章は、日本列島の形成から縄文時代までを扱う。縄文時代には狩猟の延長として川でサケを石槍で突く漁業が海での漁業に拡大し、石錘を用いた網漁法も、造船・操船の技術も、海洋経由で伝播したという。しかし漁具の素材は動物の角、骨などであったため、その大量生産は弥生時代の課題に持ち越されたとされる。第二章は弥生時代、第三章は古墳時代（5～7世紀）を扱うが、①漁業者の專業化、②管状土錘利用による網漁業の発展、③漁撈具の鉄器化が進み、「專業的漁業集落」が形成されたという。また、国家形成に向かう内乱期には、海人の機動力が時代を動かす力ともなったという。第四章の対象とされる律令時代においては、渡海制（外国から日本への渡来は自由だが、外国への渡航は制限された）の下で、海民は東アジアの盛んな交易に参加できず、不遇の時代であったという。第五章では、律令国家の動搖期以降（王朝国家、武家政権）における多様な漁業の発展が、蝦夷地、隼人世界、大阪湾などの事情にそくして紹介されている。第六章は本書の結論にあたり、中世に漁村（浦）が形成された論理が整理されて

いる。貨幣経済の発展は、交換経済に依拠している海人・漁撈民に有利だったこと、漁業生産力の発展とともに漁場争いが増加するが、その調整努力も進み、漁場利用方式が次第に制度化されていったという。

以上のように本書は、長期にわたる時代の流れを、海人の動向に焦点を絞って描いた本格的な通史である。論旨の骨格となっている網野氏の漁業史関係の著作は、大冊である『日本中世の非農業民と天皇』(岩波書店)以外にも、『中世再考』(講談社学術文庫)、『日本社会の歴史』(岩波新書)など入手しやすいものが多いし、神奈川大学日本常民文化研究所からは『海の非農業民 網野善彦の学問的軌跡をたどる』(岩波書店)も出版されているから、本書と合わせて読めば、相互の理解が一層深まると思われる。網野氏が独自の意味を付与した「列島」「半島」「大王」などの用語は本書でも正確に踏襲されており、両人の問題意識の継承関係を確認できる。

ちなみに網野氏は、日本の歴史を稻作中心、農民中心に捉える通説的理解を批判して、農民以外の職業に注目し、特に遊行・芸人、海人・獵人等に密着して新しい日本史像を描き出した。その結果、地道で実証的な歴史家でありながら、「網野史学」の生みの親としてマスコミの寵児ともなり、フランスをはじめ国際的な歴史学界で最も知られた日本人となった。非農民への注目は、自給経済ではなく交換経済を、農民的定着ではなく移動・交易を重視することと対応しており、財としては水産物・塩など交換を不可欠とする物が考察の中心に置かれたのである。

やや個人的な事情に触れれば、網野氏は

1928年1月生まれで1950年3月に東京大学文学部を卒業され、浜崎氏は1926年生まれ、1952年3月に東京大学農学部を卒業しておられる。1950年前後の激しい価値観の転換の中で、若い社会科学の卵たちが、その思索を交差させながら影響しあったことが推察される。

著者の浜崎氏は引き続き続編を書かれるという。そこで最後に、若干の要望を含めて読後感の一端を記させていただこう。第一に、海人のあり方をより具体的に知ることができれば、彼らのイメージが更に実感を持って把握できるだろうと思われた。本書でも各地の海人の相違などについての記述はあるが、それは主として土豪的な頭目についての説明であり、海人集団の内部構造(頭目と配下の関係など)、世帯の性格(世帯内の協業のあり方や海人としての継承関係など)等には及んでいない。第二に、時代的背景の叙述は必要であろうが、政治史的な記述はより簡潔であって良く、むしろ海人の日常活動に関わる社会史的・経済史的事象を充実させてほしいと思われた。

評者は、漁業経営の現状分析を行いつつ、勤務先では明治期以降の経済史を講じている者であり、古代史・中世史については高校生以上の知識を持っていない。360頁に及ぶ本書の克明な記述に対して、粗雑な紹介に終わったことをお詫びするとともに、著者が衰えない意欲と使命感によって、引き続く執筆に旺盛に取り組まれることを期待したい。

—北斗書房 2012年12月発行

定価2,500円(税別) 362頁—

(東京大学社会科学研究所 教授

加瀬和俊・かせ かずとし)